

そよかせ

通信



平成27年度版

新しい教科書のご紹介
さらに 使いやすく
生まれ変わります

●巻頭言

生活科・総合的な学習の時間 授業の質を高めるために

一般財団法人 教育調査研究所研究部長
元全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会会長 寺崎 千秋

「大好き! わたしのまち」という 子どもを育てる生活科

～「いきもの」「町探検」へ、そして総合へとつなげ広げる～
東京都練馬区立石神井小学校教諭 根本 裕美

十川小学校が地域・関係機関とともに進める 中山間地域での防災教育の取り組み

～土砂災害と孤立に強い地域づくりに向けて～
高知県四万十町立十川小学校校長 松岡 雅士

教育出版

生活科・総合的な学習の時間 授業の質を高めるために



一般財団法人 教育調査研究所研究部長
元全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会会長
寺崎 千秋

はじめに

このところ、道徳の特別教科化や英語の必修化などの動きから、総合的な学習の時間はなくなるのではないかと危惧する声が聞こえてくる。心配はわかるが、生活科や総合的な学習の趣旨や本質を考えると杞憂と言わざるをえない。なぜなら、今日、OECD 諸国の教育・キーコンピテンシー、アジアでは中国やシンガポールの教育、そして我が国の学力・学習状況調査の「活用問題」などを見渡せば、総合的な学習の重要性を再認識することができる。

したがって、今、各学校がなすべきことは、学習指導要領・総則が求めている確かな学力を実現する教育、その中核となる生活科や総合的な学習の指導を一層充実させ、日本の子どもたちの未来を拓く資質・能力を確かに育むことなのである。

そのことによって、保護者や地域の人々に、生活科や総合的な学習の重要性について、育っている子どもの姿で示し実感してもらうことである。以下に、そのための実践の充実、授業の質を高める視点と具体的な方策や手だての一例を示した

い。これを参考にして、是非、授業の質を高める取り組みにチャレンジしてみよう。

1 子ども一人一人を 見つめていますか

生活科や総合的な学習（以下「総合」と表記する）では、一人一人の子どもの思いや願い、学習課題を大切にする。授業は、教師中心の一斉型指導よりも、子ども中心の個別やグループによる活動型が多い。指導は、説明や指示中心ではなく、子どもの思いや願い、学習課題や考えを引き出す（ファシリテート）学習支援が中心となる。学習活動は、子どもが思いや願い、学習課題を自らもって、その実現や解決に向けて活動を生み出し取り組んでいく。そのために必要な知識・技能は、これまでの生活経験や学習経験を活用する。

こうした授業が展開されていることのよさに「子ども一人一人をじっくりと見つめることができる」ということがあげられる。教師中心の一斉型では、子どもが教師の発問（教師の論理）にどう反応するかを見取り・読み取ることを大切にす

る。一方、生活・総合では、子どもの活動から、その子が何を考え、何を、どうしようとしているのか（子どもの論理）、活動がどう変化しているのか、個々や集団がどのように自己実現や課題解決しているのかを見取り・読み取ることを大切にする。したがって、活動の時間の中で、可能な限り一人一人の活動を「見て、見つめて、見極める」ことが必要である。時に、全体を見渡し個々の活動状況を把握する。時に、子どもに寄り添い対話して、活動の進展を支援するその過程を通して一人一人の学習状況を把握し、この先にどう支援すれば活動が発展していくかを思案する。子どもと共に学習を創っていくことができる。子ども一人一人をじっくりと見るができるよさを生かしていきたい。

2 教材研究を楽しんでいますか、深めていますか

生活科の学習対象は、身近な人や社会、自然であり、総合の学習対象は、横断的・総合的な学習課題、児童の興味・関心に基づく課題、地域の人々の暮らし、伝統文化など、地域や学校の特色に応じた課題に関する事項や事象である。各学校固有の対象が、教材となり学習材となる。したがって、これらを素材研究し、教材研究し、さらに学習材研究することが必要となる。これは手間隙かかることであるが、少しがんばってやってみると実に楽しくなることであり、やり甲斐のあることなのである。

素材研究では、生の人や社会、自然の事象などを自分の目で見、耳で聞いて、手足を動かし

て調べて考える。それにより、町のこと地域のこと、さらには学習課題のことなど、これまでに知らなかったことについて、知識・理解が広がり深まり、そこに楽しさがある。

教材研究では、素材研究した素材について、生活科や総合の目標や内容を視点にし、子どもの発達段階や実態を考慮して素材研究した材料等が、授業で使えるように加工する。それにより、教材理解が深まり、教材観を確立していくことができる。

学習材研究では、子どもたちが教師の用意した教材や、自分たちが出会った素材との関わりや触れ合いから、自分の思いや願いの実現、学習課題の解決のために必要な材料や情報・資料を取り出したり集めたりし、自ら実現や解決に取り組んでいくようにするために、どの教材や素材が有効かを検討して、そのよさや価値を明らかにする。

このように、素材→教材→学習材のプロセスの過程は、学習活動がこれらによりどう展開するか、子どもがどう取り組むかのイメージがふくらむ。子どもの主体的な活動や探究的な活動が、教材、学習材との出会い触れ合いで生み出されていくことは、教師冥利に尽きる。



3 聞いて・助けて・見守る 学習支援を徹底していますか

生活科や総合での教師の関わり方は、「与えて・させて・見回る指導」から、「聞いて・助けて・見守る学習支援」への転換が必要である。

「与えて・させて・見回る指導」とは、学習の目当てや課題、教材を教師が子どもに与え、学習活動を「皆で話し合しましょう」「ノートに考えを書きなさい」などと指示してさせる。そして、子どもが指示したり説明したりしたように活動しているかを見回るといった教師中心の指導である。この指導は、一斉型が多くなり、基礎的・基本的な知識・技能を全員に共通に身につけさせる（習得）ことに効率的であり効果的である。

一方、「聞いて・助けて・見守る学習支援」とは、学習の目当てや課題、学習の対象、学習活動などを、子どもが何をどのようにしたいのかを聞き出し、それが実現する方向に向けて助けているようにする。そして、子どもの主体的な活動が形成され、発展していくように見守るといった子ども中心の学習活動となるように指導することであり、ファシリテーター、カウンセラー、コーチャー的な役割を果たすことである。

このように、教師が、子どもの思いや願い、学習課題を引き出し、学習過程を子どもが自力でつくり出していくように支援を中心とした指導を徹底すると、子どもは、生活科や総合では「学習は自分たちでやることができるからおもしろい」「自分たちで最後までやったから、結果が後からついてきた」と述懐し、自らの学習に意欲や自信をもつようになる。

また、子どもの思いや願い、学習課題や学習活動を引き出すためには、教師は、「このことについて何をしてみたいか」「どのようにやってみたいか」「どのようにまとめたか」などと問い掛け、

子どもから思いや願い、考えを引き出すようにする。その結果、たくさんの考えや案が出てくる。そこでまた「こんなにたくさん出てきたけど、どうしようか」と問い、皆で相談する。これには時間がかかる。しかし、確実に子どもが主体的に考え、責任をもって実行するようになる。また、時間がかかることについては、生活科や総合は、自校独自の特色ある指導計画を作成できるのであり、時間をかけた計画作りが可能である。

以上のように、生活科や総合で「聞いて・助けて・見守る学習支援」を教師が意識して取り組むと、教師の指導そのものにも指導の幅が広がり、授業力が向上し、子どもを見る目も、子どもを信頼し任せてみるように変わってくる。

4 繰り返しのある学習活動の よさを生かしていますか

生活科は、学習指導要領に示されている9つの内容を、2年間で取り扱うことになっている。また、生活科の内容＝単元ではなく、各学校が各内容から必要な事項を取り出し、自校の実態や特色に応じた指導内容を設定することができる。したがって、飼育・栽培の活動を2年間で繰り返すことや、同じ公園に何度も行って変化の様子を見取ったり、そこで遊んだりすることが可能となる。また、活動結果についての発表などでは、ポスターセッション方式で、何度も繰り返して発表する機会をもつことができる。

総合では、探究的な学習を重視することから、例えば、課題発見→情報収集→整理・分析→まとめ・表現の学習過程の繰り返しが可能である。まとめ・表現の学習活動から新たな課題を発見し、それをまた探究するという繰り返しである。

このような学習活動の繰り返しは、生活科や総合以外では、指導内容や指導時数の関連でほとん



ど不可能であり、一回性が原則である。生活科や総合では、繰り返しの学習が可能であり、これを十分に生かすようにしたい。単に繰り返すのではなく、繰り返しの中で子どもが学習経験を活用し、より質の高い学習課題に気づき、それを自力で解決していくことができるように指導計画を作成し、支援していくことが教師の役割となる。

指導計画作成の際には、繰り返しの1回め、2回め、3回めなどにおいて、子どもがどのような思いや願い、学習課題をもつか、生み出すかや、その実現や解決に当たって、どのような生活経験や学習経験を活用するか、そして、教師は、そうした学習において子どもにどのような資質や能力を育むことをねらいとするかなどを、位置づけておくようにする。

5 合科的・関連的な指導を図っていますか

生活科や総合の学習は、この教科や時間の枠の

中だけで学習は進展しない。生活科は国語、音楽、図画工作、体育、道徳、特別活動などとの合科的な指導や、関連を図る指導が必要である。総合では、横断的・総合的な学習課題等に関する内容は、各教科等にも散りばめられている。したがって、これらとの関連を図って、指導の効果を一層高めるようにすることが求められる。

生活科では、ペアや小集団での話し合いの活動が多く取り入れられている。その指導は、国語の「話すこと・聞くこと」の分野において、言語能力を身につける指導が行われており、関連を図って指導することで、子どもも何をすればよいのかが見え安心して活動できよう。

総合で、最近、「思考ツール」の活用が多く取り入れられている。この時注意したいのが、「思考ツール」の指導は、教科学習で行うようにすることである。総合の時間内に、教師がそのツールの内容や方法を一つ一つ教えるのでは、子どもは受け身になり、教師の論理で活動することになる。そうではなく、教科学習で身につけた「思考ツール」の何をどのように活用するかを子ども自身が考え、選択するようにすることが、総合の趣旨にかなうのである。

学習課題の解決に向けて、どのような「思考ツール」を子どもが選択して活用するかについて、見通しをもって指導計画に位置づけておくようにする。

おわりに

以上に提示した5つの視点は、生活科や総合的な学習の指導の特色であり、そのおもしろさでもある。そのよさを生かし、子どもの創造性や主体性、問題解決力を育むため、これらについて研究・研修を重ね、より質の高い授業を子どもと共に創っていききたいものである。

「大好き！わたしのまち」という子どもを育てる ～「いきもの」「町探検」へ、そして総合へとつなげ広げる～

東京都練馬区立石神井小学校教諭

根本 裕美

Ⅰ はじめに

子どもたちに問う「あなたは住んでいるこの町が好きですか?」と。すると、学級30名のうち2名の子どもが「すき」と答えた。その答えを聞いた子どもが「どうして、好きなの?」と不思議そうに尋ねた。「どうして大好き、じゃないの?」28名の子どもが「大好き」と答えたからだ。

生活科は、子どもが身近な地域の人、もの、ことと関わり、地域への愛着をもつように育む教科である。しかし、「地域」は、現在、子どもにとって、本当に身近な場所なのだろうか。そんな疑問から出発したのが、ここに示す2つの実践である。

Ⅱ 「虫むし大好き大作戦」 (2年生 5月～9月)

本校のそばには、自然の豊かな都立石神井公園がある。雑木林にはさまざまな虫もいて、23区内では自然に恵まれた環境にある。生き物が好きな児童は多く、9割以上が好きと答えているが、自分が主に

なって生き物の世話をした経験がある児童になると6割程度になる。これは身近な地域の生き物を探して飼うことも関連があり、3割近くの児童はその経験が「ない」と答えている。また、飼育に関して、あまり好きでないと回答した児童の理由から「虫は嫌い」「虫のことはよくわからない」とあることから、飼育経験はあっても、身近な地域にいる昆虫などの生き物を自分の手で育てる経験は十分でない児童がいることがうかがえる。「今までダンゴムシに触れたことがない」という児童も1割程度いた。

そこで、まず校庭での生き物探しを行い見つけたダンゴムシを手にのせ、よく見たり、一緒に遊んだりする時間を設けた。触れたことがない児童は、初めは恐る恐るといった様子だったが、ダンゴムシの動きや丸くなる姿に引き込まれ、やがて夢中で遊ぶ姿が見られるようになった。図書の時間などにも、ダンゴムシに関する本の読み聞かせも行った。身近な場所で生き物を探したり、飼育したりすることを楽しさを覚える児童が増えてきた(今森光彦『やあ! 出会えたね ダンゴムシ』アリス館、松岡達英『だんごむし そらを とぶ』小学館を読み聞かせた)。

1. 生き物の好き嫌い

あまり好きではない

好き 93%

7%

2. 飼育の経験

一人での飼育経験 なし

一人で飼育経験 あり 61%

39%

3. 地域での生きもの探しの経験

あり 74%

なし 26%

(2年生 85名の調査)

＝こんにちは！だんごむしカードより＝

- ダンゴムシをさわるとせなかがざらざらです。おすの足の数、14本でした。
- わたしは、ダンゴムシの歩き方をしらべました。歩き方はすごかったです。なぜかという、1本ずつ足をとばしながらすすみます。じめんのぼこっとしているところは頭からすすみます。
- えんぴつものぼれます。でも、めすをのぼらせてみたら、あんまりのぼりませんでした。

生活科



生き物探検 ～この虫は何か、教えてください。

そこで、次は石神井公園へ「生き物探検」に出かけることにした。「生き物探検」当日は、自分で生き物を探す他にも、専門家（管理事務所職員）から公園にいる生き物のことや、公園の自然保護について話していただいた。本単元に入るまで、「虫は嫌い」と言っていた児童も、すすんで草むらや葉の裏を探し、見つけた幼虫などに歓声を上げていた。身近にいる昆虫や、小さな生き物に関心をもつようになり、教室には児童が見つけた生き物が集まってきた。

- ザリガニ ◦オタマジャクシ ◦カナヘビ
- カミキリムシ ◦ダンゴムシ ◦アゲハチョウの幼虫
- カタツムリ ◦カブトムシの幼虫

多様な生き物が集まってきたことで、児童から「飼うためには調べなくてはわからないね。」という声がかかるようになった。そこで、学校図書館や石神井図書館から団体貸し出しをした絵本や図鑑、児童が持ってきた本やインターネットの資料などを使い、飼いたい生き物ごとにグループを作り、好きな表現方法でまとめた。1学期末まで昆虫熱は続き、大事に飼う様子が見られた。

ここで終わるつもりでいたが、飼育から気付いたことや、飼育の楽しさについて1年生に教えたいと

の聲が子どもたちから多く上がり、学習のまとめに「虫むし大好き発表会」を行うことにした。「どんなことを伝えたいの？ どうやって伝えるの？」と問うと、さっそくそれぞれのグループは、発表する内容や方法の話し合いを始めた。「言葉だけじゃ1年生は飽きてしまうね。」「ヤモリのかawaiiところを発表した後、触りたい子だけ触らせてあげたらどうか？」「えさのことは特に大事だから、クイズにしてミニ絵本にしよう。」など、発表方法も自分たちで決めて準備を進めた。発表会では1年生の喜ぶ様子を見て、満足して学習を終えることができた。



ウェビングの活用
～アゲハチョウについて調べたよ。



虫むし大好き発表会
～ぼくたちのかawaii虫を見てね。好きになってね。

回「この町大好き!! 石神井大発見」 (2年生 6月～11月)

この「虫むし大好き大作戦」をはさんで行ったのが「この町大好き!! 石神井大発見」である。この単元は2年生活科の中核として位置付けており、本校では主に場所を知るパート1と地域の人と関わるパート2に分け、45時間をかけて行っている。パート1では、石神井の町の好きなところやお気に入りをご紹介します。4つの地域の方面別探検に出かけた。初めて行った方面もあり「石神井って広いんだね。」「こんな公園知らなかった。」と歓声が上がった。情報交流の後は、グループで「石神井すてき発見探検」に出かけた。畑、消防署、中学校、地区区民館、商店街など、石神井のさまざまな場所に行き、ピーマンの苦手な子も食べられるようにと「子どもピーマン」の栽培に励む農家の方や、おいしいパンを食べさせたいと、1日4回もパンを焼くパン職人の方など、すてきな人との出会いがあり「もっと探検したい!」という気持ちも高まった。



ご協力してくれた地域の方々

パート2では、前の探検を思い出し、子どもたちは「この次は町の人役に立ちたい!」という願いをもって、学習を進めた。19人の地域の協力者、多くの付き添いの保護者の方々にご協力をいただき、「ごあいさつ・お手伝い探検」に出かけた。石神井公園に行った子どもは、いくら掃いてもなくなる落ち葉に、毎日掃除している管理事務所の方々の



石神井公園でのお手伝い
(落ち葉掃き)



農家でのお手伝い
(小松菜の種まき)

大変さや、公園への思いを感じて帰ってきた。商店に出かけた子どもは、商品知識の豊富さ、品物の扱い方、買わないお客さんへも笑顔で接することなどを学んできた。学校近くのお寺では、柱と床を拭くときの雑巾の絞りの違いや、足跡がつかないようにする雑巾がけの仕方などを学び、日ごろの掃除の仕方と比べていた。それぞれの体験を伝えあったところ、どの子どもの言葉からも、それぞれの場所に関わった地域の方のすばらしさや、こだわりをもって仕事をする事の大切さなどの気付きがあふれていた。

「大好き！わたしのまち」という子どもを育てる生活科

見ていたのに気付かなかったこと、そして会っていたのに知らなかった地域の人のすばらしさや温かさを実感し、「この町大好き！」になった子どもの姿があった。

四 おわりに

生活科の学習における地域との関わりはこれで終わりである。しかし、その後に行った展覧会では、作品のびん人形に、「三宝寺のご住職」「畑のおじさん」「公園の職員さん」など、町探検で関わった人々をモデルにした作品が並び、担任も驚いた。

地域の人との関わりが心に沁みていることがわかった。今、この子どもたちは3年生。「石神井公園は地域の宝」を合い言葉に、そのよさを広く伝えたいと願って、総合的な学習の時間に取り組んでいる。「ああ、石神井はいいところだな」とつぶやきながら。



町探検で関わった人々をモデルにした作品

ケーキ屋さんでのお手伝い
～私たちが並べたケーキです！

「この町大好き！ お手伝い探検発表会」に向けては、子ども一人一人が伝えたいことをグループの友達に話し、何を発表しようかと考えた。自分が気付かなかったことを友達に気付いたことに感謝したり、自分と同じことを伝えたいと考えていることを知り、本当に大切なことなんだと気付いたりした。発表会当日、お米屋さんのグループは「おじさんのすごさを発表したい。」と張り切っていた。「おじさんはお米をどれくらい大切にしているでしょう。」というクイズに答えた、聞き手の子どもは、「今まであまり考えなかったけれど、お米は大事なんだな。」とつぶやいていた。学習のまとめに書いたのが、以下の作文である。

＝この町大すき!! 石神井大発見カードより＝

- 私は働いている人のことを思い考えると、ドーナツがもっと美味しく感じるできるようになりました（ドーナツ店）。
- 地区区民館でわかったことは、必ず人にサービスしていることです。大変なことだけれど、地区区民館の人はいつもやっているのがすごいと思います（地区区民館）。
- 町や町の人を見るときに、いつも普通に思えたのに、この学習をやって町や町の人がすてきな存在

や大好きに思えるようになりました。他の組の知らない人とも力を合わせて、がんばれたなと思いました（酒店）。

- 前は知っている人でも「忙しいですか」「おはようございます」とかは言えませんでした。でも今は知っている人に「おはようございます。今日は忙しそうですね」「がんばってください」などと言えるようになりました（保育園）。

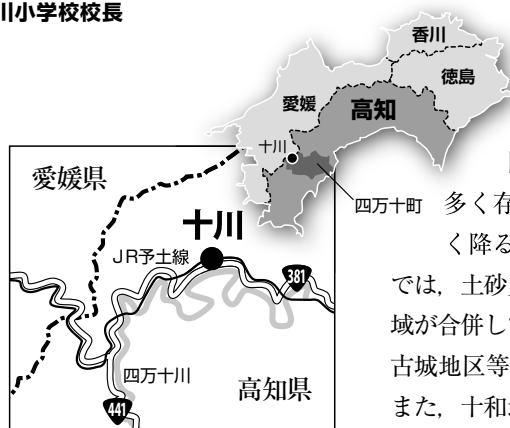
十川小学校が地域・関係機関とともに進める 中山間地域での防災教育の取り組み

～土砂災害と孤立に強い地域づくりに向けて～

高知県四万十町立十川小学校校長

松岡 雅士

十川小学校（児童数69名）のある十川地域は、高知県高岡郡四万十町西部に位置し、愛媛県と接している（地域の人口約2,000人）。



四万十川中流域の急峻な山間部に集落が点在し、台風や集中豪雨、南海地震等の災害時には、土砂災害が発生し、道路が各地で寸断され、一定期間孤立することが予想されている。このような地域において、平成23年度より学校、地域と行政の連携を図りながら「土砂災害と孤立に強い地域づくり」に向けての取り組みを進めている。

■ 十川小学校「防災教育」の基本的視点

土砂災害は地震でも起こるし、大雨でも起こる。特に高知県は、面積の84%が山地であり、地形が急峻である。また、脆弱な地質のため、土砂災害危

険箇所が18,112箇所と全国で7番目に多く存在し、雨も年間2500mm前後と大変多く降る。このような自然条件のもと、高知県では、土砂災害がよく発生し、十和（十川・昭和地域が合併して旧十和村に）地域でも、5年前に十川・古城地区等で集中豪雨による土砂災害が発生した。また、十和地域は山間部に集落が点在し、南海地震をはじめとする大災害時には道路が各地で寸断され、たくさんの地域が一定期間孤立することが予想されている。

このような中、平成23年度より「子どもと高齢者の視点」で、災害に強い地域づくりを目標としての防災教育の取り組みがスタートした。この取り組みは、本校児童も中心的一かかわる形で、高知県土木部・危機管理部、四万十町、区長組織、地域自主防災組織、関係機関と連携し、工程表をもって2～3年計画で取り組むという、あまり例を見ないものとなっている。

その取り組みの基本として、以下の点が確認されている。

- ①子どもたちが専門家や地域の方々とフィールドワークを通して、素直な目線で「地域の防災・安全点検」を行い、安全・安心な地域づくりに向けて、防災マップ等にまとめる。
- ②学校関係者によくある独りよがりな見方を避けるため、専門機関との連携を重視する。
- ③さまざまな防災体験をおこない、未来の地域防災リーダーを育て、学校から地域全体の活動へと発展させ、地域の防災力の向上を目指す。
- ④取り組み内容と提言等をいろいろな方法を通じて地域に発信する。

平成25年3月18日 中央防災会議公表の
南海トラフ巨大地震による孤立可能性集落
高知県が 全体の40%の「935集落」に

農業孤立可能性集落数(全国で1,916集落)
...高知県1,226集落中 863集落が 四万十町51集落

漁業孤立可能性集落数(全国で389集落)
...高知県139集落中 72集落が 四万十町3集落

合計孤立可能性集落数(全国で2,305集落)
...高知県1,365集落中 935集落が (なんと68%)
四万十町54集落

中山間地 対策に遅れ...「沿岸より後回し」懸念
(高知新聞見出しより)

- ⑤多くの方々の力をかりて防災学習を進める中で、子どもたちに地域社会の一員としての社会貢献の意識を育てる。

② フィールドワークとマップ作り

① 1年め 試行錯誤でのスタート

23年度は、高知県防災砂防課の職員を講師に招き、土砂災害の基本や過去の災害から学ぶ学習会を2回開催し、3回のフィールドワークを通して5地域の防災マップを完成させた。マップでは安全な道等は青色、注意すべき道等は黄色、危険な道等は赤色に塗り分け、同色の付箋紙でその根拠が記載されている。



▲マップ作りの様子
◀付箋紙と色分けで作られた防災マップ

② 2年め 取り組みの質的向上と地域配布用マップ（5地域）の作成

24年度は、取り組みの継続性を考え4～6年生を縦割り班に分けることにした。指導する教職員の力

量向上を目ざし、5月に地質の専門家集団である「四国地質調査業協会高知支部」（2年目から取り組みへの全面的協力態勢に）のメンバーを講師に招き、教職員、行政職員、地域自主防災組織のメンバー40名を対象に、土砂災害の専門的な学習会を開催した。

続いて、6月には4～6年生児童を対象に教職員と地質のメンバー、県の職員が講師となって、土砂災害の基本学習をプレゼンテーションと実験でおこなった。続いて、災害対応教材「クロスロード」を使用し、児童自らが非常時を想定し、災害時の対応を自らの問題として考えるようにした。また、前年度作成した「地域防災マップ」を使い、内容（地理的状況、避難場所の位置、危険箇所、避難

経路等）を確認し、24年度のフィールドワーク、マップ作りの基本について学習し、バージョンアップした取り組みに備えた。

これらの基礎学習をふまえ、児童は基本となる「等高線等が記載された模造紙大マップ」に、高知県作成の土砂災害危険箇所マップをもとに「急傾斜地崩壊危険箇所」^(注1)「土石流危険渓流・区域」^(注2)を正確かついねいに書きこみ、1回目のフィールドワークに備えた。

(1)7月に5地域のフィールドワークを行い、土砂災害危険箇所を知り、同時に地質の専門家より学ぶことで、土砂災害が発生しやすいポイントを地形・地質的につかんだ。平成21年度をはじめとする過去の災害現場を確認し、土砂災害を防ぐ方法と施設を知り、班毎に調べたメモや写真をマップにまとめた。

(注1)「急傾斜地崩壊危険箇所」とは、崩壊するおそれのある急傾斜地で、高さが5メートル以上、傾斜度が30度以上で、崩壊により危害を生じるおそれのある箇所をいう。また、1戸以上の人家、公共施設等に危害が生じるおそれのある土地の区域で、知事が指定した区域を「急傾斜地崩壊危険区域」という。

(注2)「土石流危険渓流・区域」とは、渓流の勾配が15度以上で土石流発生危険性があり、人家や公共施設に被害を生じるおそれのある渓流をいう。また、人家や公共施設がない場合でも、一定の要件を満たし、住宅等が新規に立地する可能性があると考えられる場所に流入する渓流も含む。

(2)10月には、地域の土砂災害危険箇所を再確認するとともに、どういう避難経路が安全なのかを児童目線で確認して、マップに記載した。実際に何度も現地を確認することにより、いくつかの地区では町指定の避難場所まで行くことが難しいとわかり、児童から「地域の鎮守である神社等」の新しい避難場所の提案が出た。

(3)11月には避難経路（道路と橋）の安全性、新たな避難場所の適否と要望する設備（防災倉庫、階段の手すり等）、ヘリポートやホバーリングによる救援物資を投下できる場所について確認した。「児童防災提言」について専門家の意見を聞き、現地で検証を行い、5地域の「地域防災安全避難マップ」の基本（原版）を確立させた。

(4) 2年間合計6回のフィールドワークを通して、児童は地域に配るマップを完成させた。土砂災害危険箇

所情報の他にも、ヘリポート可能地などを記載したマップを平成25年2月に配布。配布マップは3月3日に十和地域各地で行われた自主防災組織の訓練で活用された。本年度は残り7地域のマップ作りを進め、平成26年2月には地域へ配布した。

㊦ 孤立対策に向けての体験活動

災害時を想定して、第2回の炊き出し訓練と救急法訓練を平成24年10月23日小雨の中、全校児童と地域自主防災組織の方々で実施した。現実孤立した時を想定し、地域で備蓄してある食材で「どう生き抜くか」の視点を大切に訓練を目ざした。地元にはたくさんある薪を使って火をおこし、学校の田んぼで収穫し備蓄しておいたお米を使い、飯盒炊爨を行った。この時は豚汁としたが、来年度は、地域で備蓄されている食材を使いイノシシ汁をすることになっている。今年度は孤立に備え、全校児童で保存食作りを行った。食材は鹿肉で「ジャーキー」を12キロ作った。鹿肉ジャーキーのよさは、①鳥獣害対策のひとつになる②長期保存できる③常温保存できる、ことがあげられる。



炊き出し訓練

㊦ 減災に向けての活動

南海トラフ巨大地震による被害想定において、四万十町では、死者数650名中310名が建物倒壊により死亡するとされている。大地震時に家屋が倒壊さえしなければ、津波や土砂災害の避難場所に速や



完成し、地域に配られた「防災マップ」

十川小学校が地域・関係機関とともに進める中山間地域での防災教育の取り組み



「戸建て建物の耐震化と家具の固定の重要性を学ぶ」学習会

かに避難できるし、人命を守る可能性をぐんと高めることができる。そこで6月27日、高知市の建設会社の専門家3名を講師に招き、「戸建て建物の耐震化と家具の固定の重要性を学ぶ」学習会を昭和小や地域住民を含む120名以上の規模で実施した。「耐震・防災グッズ」の展示コーナーも設置した。

Ⅲ 取り組みを広める活動

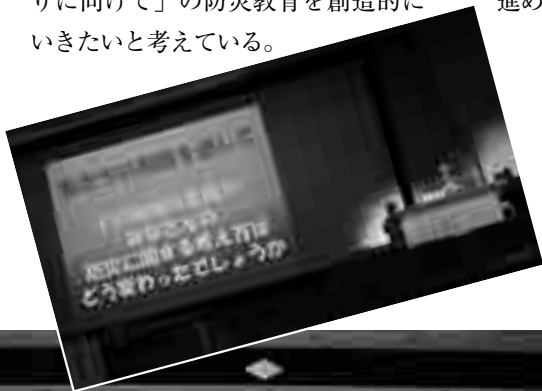
「土砂災害に関する防災教育」を継続的・組織的に行っている地域や学校は全国でも少ないようで、NHK高知局や四万十ケーブルテレビからも継続的に取材を受け、地域住民や県民の関心が、次第に広がってきている。

3年めの節目にある11月29日(金)には、本校体育館で「土砂災害を知る・備える・行動する」をメインテーマに防災シンポジウムが開催され、小中学生を含め町内外から300名をこす参加があった。会では砂防学会長・全国治水砂防協会理事長の岡本正男氏による講演に続いて、児童による「十川小の防災教育と住民意識の変化と課題」と題したプレゼンテーションが行われた。そのほか、四万十町長、高知県防災砂

防課長、地質調査業協会高知支部長、小学校長及び小中学生、地域住民が参加し、「土砂災害と孤立に強い地域づくり」をテーマとして、ダイナミックなパネルディスカッションが行われた。

Ⅳ 終わりに

高知県をはじめ、たくさんの方々のお世話になりながら取り組んだこの3年間であった。児童も教職員も多くのことを学び、学びの成果を地域に発信することの大切さを実感した。本校の取り組みは、いつの間にか、中山間地域における「土砂災害に関する防災教育」についてのパイオニア的な役割を担うまでに発展してきた。「11.29 シンポジウム」を経て、高知県内で土砂災害教育を進めていこうという気運が高まってきている。これからも十和地域、四万十町の学校との連携のみならず、県内外に組みの発信を行う中で、「土砂災害と孤立に強い地域づくりに向けて」の防災教育を創造的に進めていきたいと考えている。



防災シンポジウム

平成27年度版

新しい教科書のご紹介

さらに使いやすく
生まれ変わります

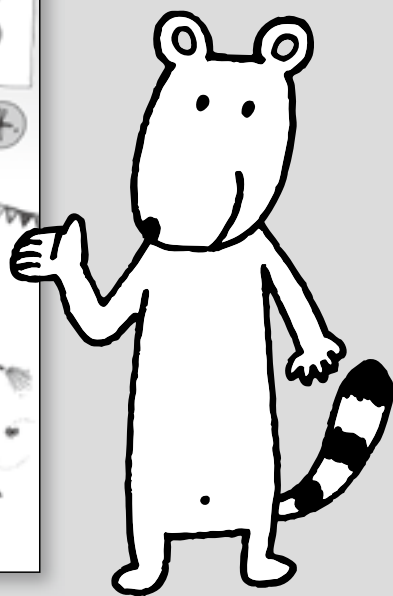
表紙を縦に
つなげてみてね



1
紙面
すっきり

2
学力
しっかり

3
資料
ばっちり



生活科キャラクター「ぐんぐん」

1
紙面
すっきり

現行の教科書よりも紙面を大きく
ページ数も増やして、余裕のある構成に。

上巻P20～21

現行本



上巻P36～37

増
ページ

上巻 98→**120** ページ
下巻 102→**114** ページ

- 特に、入学期は、ページ数や資料を増やし、よりスタートカリキュラムに対応できるよう工夫しました。

ねらいや活動の流れが、くっきり見える

この活動では、何をどのように学ぶのか。

ねらい、学習内容、ヒントなどをわかりやすくまとめました。

ナビゲートライン

- 大切な情報を
同じ位置に
配置しています。

巻末の「ポケット」
をつかってね

学習のねらいやポイント

野さいの ことを つたえよう

記ろくを
まとめよう。

どんな ことが あったのかな。



12

下巻P12～13

●身につけさせたい習慣や技能は、何度も繰り返して見やすいよう、巻末にまとめています。

学びの引き出しを増やす 「ポケット」

下巻P98「話し合おう」

巻末の「ポケット」へ

下巻P100「はっぴょうしよう」

●好評の「単元関連の
絵本紹介」は、上巻
にも新設しました。

上巻P118「本を よもう」

教科関連マーク

巻末の「生活科ノート」へ

●各単元末には、
自己評価欄や
家庭連携項目を配置。

下巻P113

生活科ノート

4月 5月 6月 7月

野菜を そだてて
うれしかった ことを 書こう。



まきも たんぱんして
どんな ことが
わかったかな。

自分だけが
そだてた
ひみつを

2

学力
しっかり

生活科で育てたい力が、しっかり身につく

諸感覚をフル活用させ、「見つける、比べる、たどる」などの多様な捉え方を促します。

活動時のヒント

の かたちや いろや
わりを しらべよう。

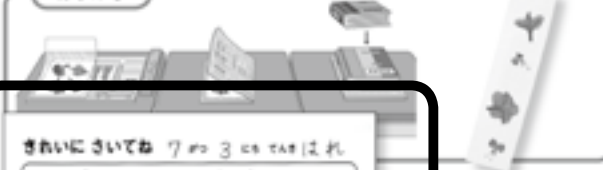
いたね。

2 ず さ

いろみず



おしばな



きれいにさいてね 7の3にさしてはれ

はなが さいたよ

1は 1は ながしま みく

さわったらふわふわ

つぼみは

みずいろ



わたしのあさがおが1つさきました。
おおきくてむらさきいろです。
「まいにち みずをくれてありがとう。」
と わらっていました。

あさがおの こえが きこえたのは すばらしいですね。
ここを こめて そだてたからです。

はっけんひんと



どんな てざわりかな。



どのくらいのおおきさかな。



いくつ さくかな。



注意事項

はってん

あさがおの はなの
しるに いろいろな
ものを まぜると
どう なるかな。



41

上巻P41

しっかり読み取れるカード例

- 大きなカード
- 具体的な内容
- 気付かせたい視点
- 丁寧な文字
- 支援の言葉

社会科・理科につながる
「はってん」

3 資料 ばっちり

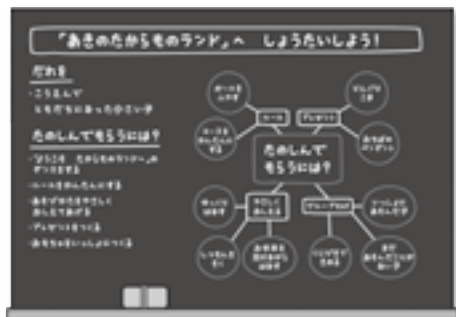
びっくり はてな

！？ 学習意欲を高める資料群

子どもたちの好奇心を刺激し、期待感を育む。

学習・授業の参考となる資料を、これまで以上に充実させました。

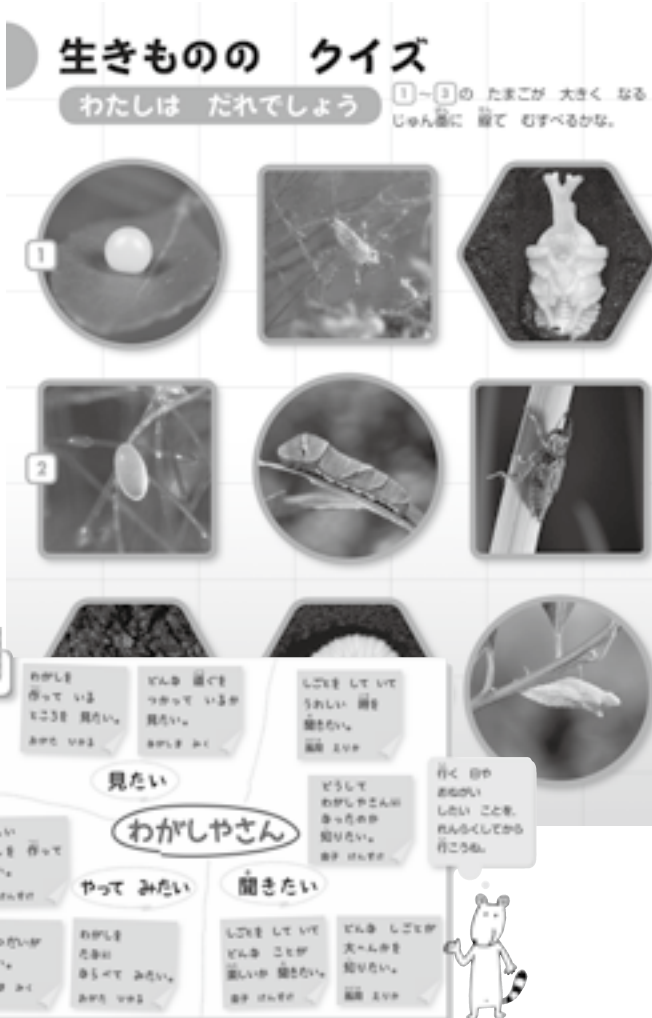
上巻P75
板書例



上巻P45 体を使った表現の例 (レンヂキューラー／立体印刷)



下巻P46「生きものの クイズ」



下巻P53 付箋紙の活用

指導書・周辺教材

指導書添付の『なかよしソング』の新曲には、ダイヤモンド☆ユカイさんに、2曲を書き下ろしていただきました。家族の愛情たっぷりの素敵な楽曲です。

「歌、音楽は楽しいよね。子どもの頃好きだった音楽を聴くと、その頃の情景や匂いを思い出す。

この曲も、全国の子どもたちみんなに歌って欲しいな。」

*デジタル教科書や拡大教科書の発行も予定しています。





第12回

地球となかよし メッセージ

作品募集 (2014年度)

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、
写真 (またはイラスト) にメッセージをつけて表現してください。

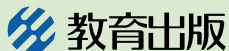
応募者全員に
参加賞が
もらえるよ!

応募資格	小学生・中学生(数名のグループ単位での応募も可)
応募期間	2014年7月1日～9月30日 詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧ください。
作品 テーマ	①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや、自然環境 や生き物を守るための取り組み ②さまざまな人との出会いを通して、友好の輪を広げた体験、異文化交 流、国際理解に関すること ③その他、「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたこと

◎主催／教育出版 ◎協賛／日本環境教育学会
◎後援／環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞
※協賛・後援団体は昨年実績で、継続申請中です。

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね

<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>



教育出版

「地球となかよし」事務局

TEL 03-3238-6862 FAX 03-3238-6887
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

前回
入選作品



たんぼぼって、すごい!

おにわに、もうすぐ「わたげ」になりそうな「たんぼぼ」
がありました。それを、ままがぬいてしまいました。「か
わいそう」とおもって、もうすぐ、わたげになりそうな「た
んぼぼ」を、そおとそのまま、げんかんにおいておき
ました。するとびっくり!! 水をつけていなかったのに、
2日ごとに白い大きな「わたげ」になっていました。「た
んぼぼ」のつよさにおどろきました。かってきた、花び
んのお花は、水につかっていたいなかったら、すぐにかれて
しまうのに。

しげんって、すごいなあとおもいました。わたしも、
たんぼぼのように、こまだったことがあってもしぶんでな
んとかできるつよさをもちたいです。

生活科・総合通信 そよかぜ通信 【2014年 春号】2014年3月31日 発行

編集：教育出版株式会社編集局

印刷：大日本印刷株式会社

発行：教育出版株式会社 代表者：小林一光

発行所：教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

電話 03-3238-6864(お問い合わせ)

URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技
術の進展や国際化、情報化、高齢化などによっ
て、今、大きく変わろうとしています。このよ
うな社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆ
る命がのびのびと生きていくためには、人や自
然を大切にしながら、共に生きていこうとする
優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」
というコンセプトワードに込め、社会のさまざ
まな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社	〒060-0003	札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル6F TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
函館営業所	〒040-0011	函館市本町6-7 函館第一生命ビルディング3F TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
東北支社	〒980-0014	仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル7F TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
中部支社	〒460-0011	名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル5F TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
関西支社	〒541-0056	大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル7F TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
中国支社	〒730-0051	広島市中区大手町3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル5F TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
四国支社	〒790-0004	松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル5F TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
九州支社	〒812-0007	福岡市博多区東恵比寿2-11-30 クレセント東福岡 E室 TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140
沖縄営業所	〒901-0155	那覇市金城3-8-9 一粒ビル3F TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411